

文化情報誌

たわわ

2020 No.109

「たわわ」というタイトルには「小さな情報がたくさん集まって多くの実を結ぶように」という期待が込められています。



宇宙の中の
ひとりの小さな自分を感じる

アクアマリン ミマスさん



平塚市博物館のプラネタリウムは僕の活動の原点です。

小学生の頃理科の授業で習った「星」にのめりこんで、毎週のように通っていました。

プラネタリウムで流れている音楽に興味を持ったのが音楽活動のきっかけでもあります。

シンセサイザーを使った幻想的な音楽に魅了されて、学芸員さんに曲名を聞いて自宅のピアノで練習していました。

当時の僕が楽器に触れるのは学校の授業のリコーダーぐらいのもの。母と姉はピアノを習っていましたが、僕は習っていませんでしたので完全に独学です。指遣いもめちゃくちゃだし、今も楽譜をちゃんと読めるわけではありません。好きな曲を練習するときも耳でコピーするばかりでした。

作曲するようになったのは高校一年生の頃からです。キーボードを使いながら一人で曲を作り続けて、大学生の頃に平塚市博物館のプラネタリウム上映のBGMに使ってもらいました。

いろいろなところで演奏する機会をいただきますが、プラネタリウムで演奏できることが一番名誉なことだと思っています。普通の音楽家にとって、プラネタリウムは音の響きもよくないし真っ暗で手元が見えないので好まないものですが、僕にとっては一番幸せな場所です。

今では、平塚をはじめとして、日本全国のプラネタリウムで演奏する機会をいただいています。

僕が作詞作曲した「COSMOS」は、不思議な広がりを見せている曲です。

長野県の星まつりイベントで演奏した際に、東京都内のある小学校の先生が好きになってくれ、出版社に売り込んでくださったのがきっかけです。編曲家の先生のお力添えもあって、その後全国の小学校で歌われるようになったと知りました。我が家の子どもが入学した時の小学校のたよりに、前年の卒業生がCOSMOSを歌ったという記事があってびっくりしました。



学校での演奏

そういうきっかけもあるのか、今では校歌や学校の愛唱歌の制作依頼を受けることも少なくないです。

愛唱歌を作る大きなきっかけになったのは、東日本大震災でした。

山形県内のある小学校から、被災して避難している方々にオリジナルの歌を披露したいという依頼が来て、子どもたちが書いた詩を組み合わせ作詞し、曲を作りました。

また、岩手県釜石市では、僕の作った「地球星歌」を中学生が第九のコンサートで歌ってくれたのですが、それに感動した岩手県のラジオ局の方がつないでくれたご縁で、釜石市の被災した中学校の生徒の思いや言葉を集めて曲を作り上げたりもしました。

あの震災は僕の人生にとっても、音楽活動にとっても、大きな節目となりました。

それまでは100%自分の好みで作詞作曲をして、音域もボーカルの妻に合わせて仕上げるだけでしたが、人の思いが詰まった言葉を繋ぎ合わせて作詞して、曲を作り上げるというのはとても大変なことです。

けれど、あの時は悲惨な状況を目の当たりにして自分に何ができるのだろうと考えて、ただただできることをするのに夢中でした。逃げ出したくなるほど重たい気持ちになったりしましたが、あの時曲を作った縁もあって今では毎年釜石市に赴き、立派に立ち上がって行く彼らに会うのは僕の音楽活動の大きな活力になっています。

空を見上げる、星を見るということは、特別な趣味ではありません。星を見て宇宙を感じる。そうすると自分が立っている地球を意識できます。宇宙から見れば地球はほんの小さな存在に過ぎなくて、



自然に触れる

その中で争いはまるで砂粒のように些細なことでしょう。これまで多くの歌を作りましたが、その根底に流れているのは、この地球という星に私たちが命を授かって存在していることの素晴らしさにスポットライトを当て、あらゆる命が大切にされる世界を実現したいという思いです。

毎週日曜日の夜に、FM湘南ナパサで季節の星座や天文の話と音楽の1時間番組「ミマスの星空音楽館」をやらせていただいています。皆さんもぜひ、星や音楽を身近に感じ、宇宙の中にいる一人の小さな自分を意識して、平和を願いながら空を見上げる機会を増やしてみてください。

アクアマリン ミマス

星空・宇宙・自然・旅などをテーマに歌を作る音楽ユニット『アクアマリン』のメンバー。作詞作曲、キーボード、ギター担当。平塚市在住。

FM湘南ナパサ (78.3MHz) で毎週日曜日の夜8時～9時に「ミマスの星空音楽館」でパーソナリティを務める。オリジナル曲の制作のほか、茅ヶ崎市立汐見台小学校校歌や全国の小学校の記念歌愛唱歌の作詞作曲を行う。



2019年は兵庫県児童合唱連盟の委嘱を受けて合唱曲『ふたつの海』、岩手県の北上市立黒沢尻北小学校の創立40周年を記念して制作された合唱曲『虹が生まれる』を作詞作曲。

2001年から天文雑誌の『月刊星ナビ』誌で毎月コラムを連載中。2019年3月から月刊誌『教育音楽』でコラム連載を開始。アクアマリンの公式サイト<http://www.aqumari.com/>

ひらつかの文化財を知ろう⑳

相模川流域の交流圏と平塚

平塚市の東部を流れる相模川は、富士山に発し、相模湾に流入する大河です。こうした大河は、地域を画する緩衝帯（バッファーゾーン）と捉えられがちですが、古代においてはむしろ河川を中心に流域圏を形成していたことが、最近の調査からわかってきています。

平塚市北部の大神地区は相模川の自然堤防上に展開する集落ですが、牛山古墳、宮戸古墳（寄木神社境内）といった墳丘が残っています。なぜ相模川に面した自然堤防上に古墳があるのか不思議に思っていたのですが、圏央道の調査で、対岸の寒川町から古墳時代後期の前方後円墳を含んだ古墳群の痕跡や古墳時代の住居跡から銅鏡（乳文鏡）が発見されたことで、疑問が氷解しました。さらに、大神から程近い上流、厚木市戸田小柳遺跡からは、「位至三公鏡」といった珍しい鏡が発見されています。こうしたことを合わせると、相模



牛山古墳

川を挟んだ下流域に地域交流圏が形成されていたと考えることができそうです。

時代は下りますが、『続日本後記』、『日本三代実録』といった六国史に承和七年（840年）から貞観元年（854年）にかけて、相模国大住郡大領（郡司）壬生直（みぶのあた）広主が窮民を救済したことによる叙任記事がみえ、また、対岸の高座郡司として承和八年（841年）に壬生直黒成が同じく窮民を救済していません。相模川を挟んで両岸に壬生氏の一族が郡司として勢力を持っていたのです。このように、少なくとも古墳時代から平安時代には相模川流域交流圏というべき地域圏が行政単位の郡とは別に成立し、河川交通をとおして活発に活動していたことを知る事ができそうです。ちなみに、窮民の救済の原因は、相模川の氾濫ではないかと考えていますが、記事にはなにも書かれていません。考古学的な調査がこうした疑問を解決してくれるかもしれません。



平成16年 牛山古墳の調査
(平塚市文化財調査報告第35集 平塚市教育委員会
平成20年（2008年）3月)

リトアニアだより(9)

リトアニアで和太鼓演奏してきました

2019年11月3日から11月10日まで、リトアニア共和国を訪問し、和太鼓の演奏に行ってきました。今回の訪問は文化交流の一環で、ひらつかリトアニア交流推進実行委員会から平塚市の特徴的な文化芸能団体として、私たち相州平塚七夕太鼓保存会を推薦していただいたことで実現しました。

私たち七夕太鼓は、過去にもアメリカや韓国で演奏してきましたが、奇しくも最後の海外公演が24年前のリトアニアでした。リトアニアとの縁を感じざるを得ません。



カウナス市教育関係者による出迎え

リトアニアの気候は大変寒く感じましたが、現地の方の話では滞在期間中は例年より暖かかったそうです。

訪問した都市は首都のビリニュスと、演奏を行ったカウナス市、アリートゥス市の3都市でした。いずれの町も中世ヨーロッパの街並みを今に伝える旧市街があり、とても魅力的な町でした。リトアニアは歴史的にはとても繁栄した時代もあれば、侵略されていた時代もある国ですが、民族として誇りをもっていることを短い滞在期

間でしたが、多くの方と触れ合った中で感じる事ができました。

私たちの公演はカウナス市とアリートゥス市でそれぞれ2回ずつ、計4回行いました。いずれの公演でも観客の皆さんの反応は素晴らしく、手拍子も交えて大変な盛り上がりでした。最初は太鼓の音の大きさにびっくりしていましたが、すぐに楽しそうに演奏を聴いていました。



和太鼓に触れる現地の人々
©Deivis Slavinskis

観客の方に太鼓を叩いてもらうコーナーでは、ステージに人が殺到するほどでした。多くの方が初めて和太鼓に触れ、大変楽しんでいただいたと思います。

最後に私たちの滞在中の移動や、太鼓の運搬などのお世話をいただいたカウナス市の教育委員会の方には大変感謝しています。またリトアニアに行きたいと願っている次第です。



アリートゥス音楽学校での公演

相州平塚七夕太鼓保存会
代表世話人 今井裕久

足もとの星座たち 第9回

平塚駅周辺の商店街に設置された星座絵タイルを紹介する「足もとの星座たち」、第9回は、見える季節は夏と冬の真反対ですがギリシャ神話的には親子の星座である、はくちょう座とふたご座を紹介しましょう。

はくちょう座は、ギリシャ神話における神々の王ゼウスが、スパルタの国の王妃で絶世の美女と謳われたレーダーに会いに行くために変身した美しい白鳥の姿です（諸説あります）。白鳥と出会ったあと、レーダーは2つの卵を産み落とし、その1つからカストルとポルックスの兄弟が（後述するふたご座）、もう1つからヘレネーとクリュタイムネーストラーの姉妹が生まれたとされます。

はくちょう座は、夏の大三角の一角を担う1等星デネブを擁する大きな十字架の姿をしています。くちばしにあたる星アルビレオは有名な二重星（肉眼では1つの星にしか見えないが望遠鏡で見ると2つの星がならんで見える星）で、宮沢賢治の代表作『銀河鉄道之夜』にも登場します。彼が書いているように色違いの星が寄り添っている姿は必見です。またはくちょう座は天の川の上を飛ぶように位置していることから、星雲や星団といった天体も数多く見られます。

ふたご座は、前述したように白鳥に変身した神々の王ゼウスと出会ったスパルタの王妃レーダーが産み落とした卵から生まれた兄弟です。ギリシャ神話では、兄のカストルはスパルタ王の子、弟のポルックスはゼウスの子とされます。カストルが2等星、ポルックスが1等星と弟の方が明るいのは、そのためだと言われます。

ふたご座は、冬の夜空高く昇る星座で、本号が発行される2月頃には夜の8時～9時頃に頭の真上近くに見ることができます。カストルが白色、ポルックスがオレンジ色の星で、仲良く並ぶその姿は洋の東西を問わずペアとして見られてきました。日本では「がにのめ（蟹の目）星」や「金星銀星」といった和名が伝わっています。

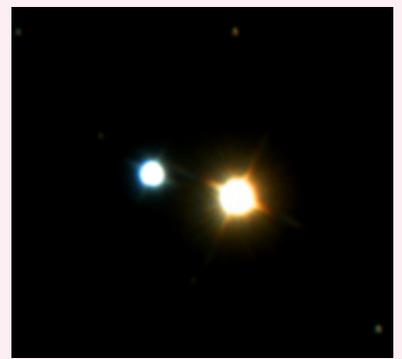
はくちょう座の星座絵タイルは銀座通りの中ほど、三井住友銀行と平塚信用金庫が向かい合う交差点に、ふたご座の星座絵タイルは公園通りと国道1号線が交わる交差点に設置されています。

ぜひ探してみてください。

（平塚市博物館学芸員）



はくちょう座の絵タイル



二重星アルビレオ
（© 阿南市科学センター）



ふたご座の星座絵タイル

平塚市文化振興基金に御協力を

平塚市文化振興基金は、市民文化の振興を図るために活用されています。基金に御協力くださる方は、平塚市文化・交流課まで御一報ください。

■基金に御寄附いただいた方々

（2020.1.31現在。敬称略）

2019年12月26日 竹遊会

平塚市文化振興基金は、小学校アウトリーチ事業、ひらつか音楽のおくりもの、第九のつどい、市民合唱祭、各種囲碁事業など、市民の皆様が触れる多くの事業で活用されています。



発行

平塚市文化・交流課 | 〒254-8686 平塚市浅間町9-1 電話 0463-32-2235 FAX 0463-21-9756

令和2年(2020年)2月15日発行 e-mail bunkoh@city.hiratsuka.kanagawa.jp ホームページ http://www.city.hiratsuka.kanagawa.jp/bunka/page-c_00216.html